

初夏の木の実 クワの実を味わう



ヒキガエルの桑実胚

H21.5.30

「**卵割**が進むとクワの実の形をした桑実胚となり、その後胞胚になる。」(第一学習社)。生物Ⅰを学んだ高校生には、ウニやカエルの「桑実胚」はお馴染みであるが、本物の「クワの実」を目にする高校生は、ごくわずかであろう。私の高校時代もそうだった。生物学を志す私にとって、桑実胚の名前の由来となったクワの実は、いつか出会わなければならない憧れの果実であったのだ。クワの実→桑実胚→動物の発生→カエル。高校時代の「クワの実」への思いが、その後の人生を大きく動かすことになるとうとは、当時は知るよしもなかったのである。

私の中では特別の存在であった桑の実。しかし、昨年6月。生物同好会のメンバーで渡良瀬遊水池を調査した際、そこら中が桑の木だらけで、大量のクワの実が熟していることを知ってしまった。…こんなに簡単に手に入るとは。複数の家族が夢中になってクワの実を集めている。聞けば、ジャムをつくるのだという。「お前らはそれをジャムにして食っちゃうのか。」

一瞬そう思いかけたが、クワの木はもともとカイコガのエサとして古くから栽培されてきた植物だ。赤から黒紫(どどめ色:クワの熟した果実をどどめと呼ぶことに由来する)へと熟したクワの実は、人々の味覚を楽しませてきたはずだ。そう、食べるのが正解なのだ。思い切って、どどめを食べてみると、意外にさわやかな甘い味がした。



渡良瀬遊水池の道路の両側は桑の木だらけ